

世界トレイル0選手権

2010年8月8日～12日 ノルウェー トロンハイム

パラリンピッククラス 2名、
オープンクラス 3名の選手が
世界の頂点に挑んだ。

2010年8月8-12日 ノルウェー トロンハイム
世界トレイルオリエンテーリング選手権

今年の舞台

今年の世界トレイルオリエンテーリング(トレイル0)選手権は、ノルウェー第3の都市、トロンハイムで開催された。フットオリエンテーリング(フット0)の世界選手権と同時開催だ。

ノルウェー

トロンハイム

日程

- 8月 8日：開会式
- 8月 9日：モデル1
- 8月10日：Day1
- 8月11日：モデル2
- 8月12日：Day2

開会式

開会式は8月8日の夕方から。同日はフット0スプリント種目の予選決勝があり、決勝Finishとなった市内中央広場でスプリント決勝の余韻が残る中始まった。臨時に設営された舞台での盛大な開会式であった。



開会式会場を埋め尽くす観客/選手



臨時設営舞台での開会挨拶



今年の日本選手団 森長三(前列左)、木島英登(前列中央) [Pクラス]
鈴木規弘(2列目右から2人目)、田中徹(同3人目)、木村治雄(同4人目) [Oクラス]

モデル1

城塞公園のようなところを0-Map化したエリアに12個+タイムコントロール(TC)1個が設定されていた。コースを回ってみた感想は、日本の公園Mapと大差ない。地図に描かれている点・線・面が現地のどれを表しているかを正確に把握すること。いつも日本でやっていることをそのまま実行すればいい。そんな感じであった。

この日は、他国のチーム随員から何度か声をかけられた。前週に開催されたトレイル0のヨーロッパ選手権で、日本は客員参加ながらノミネートした3名全員が満点というぶっちぎりの圧勝をしていたのだ。要は「日本、強いね。この世界選手権でも警戒しているよ。」という訳だ。日本が上位国の一員であると感じる瞬間である。

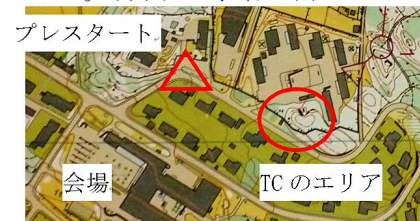
Day1

小学校を会場とし、隣接する博物館とその周囲の公園のようなところがDay1の舞台。屋内の選手控え室が用意されていた。屋外を主会場とすることが多い印象のある海外レースでは珍しいことのように思える。更衣所兼選手控え室となった部屋にはプロジェクターでスタートリストが大きく映し出されていた。



出番を待つ選手達(スタートリストの前で)

会場から200mくらいのところにプレスタートがあり、そこからさらに200mほど進んで最初にTC。それが済んだら、さらに50mほど進んだところが実際のコースのスタートというレイアウトであった。(下図では、右が北)

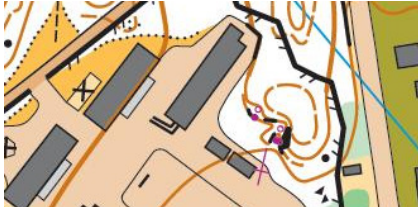


同じフラッグ群を使って2間のTCが設定されていた。珍しい方式だが、前日のモデルイベントやチームオフィシャルミーティングで示されていたから、さほど驚きはない。比高3m程度の小さな丘に所どころ岩が露出している、それが岩ガケの記号で書かれている。そ

れらと、地面のへこみが形作る小さな沢にフラッグ群が配置されていた。日本でも目にするこのある地形だ。

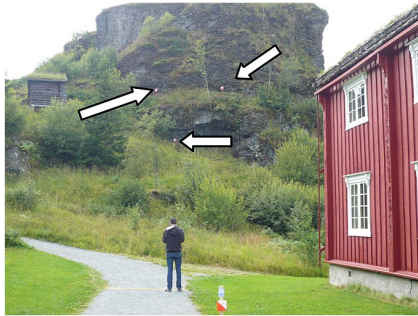


PクラスのDP付近から見たフラッグ配置



実際のフラッグ配置(左上が北)

そこからしばらくは、日本でもなじみのありそうな、里山の中のコースといった趣だったのだが、⑤に現れたのは高さ10mはありそうな巨大な岩ガケ。こういった岩ガケは日本にはあまりなじみがない。この後も⑦、⑩、⑬、⑯と似たような岩ガケに課題が設定されており、異国でのレースということ意識させられるコースとなっていた。



⑯コントロール。矢印の先にある小さな白っぽい点がフラッグ。岩ガケの大きさを感じてもらえるだろうか。

さて初日の成績だが、パラリンピッククラス(Pクラス)、オープンクラス(0クラス)とも満点4名ずつと、実にハイレベルな争いとなっていた。わが日本はそんな中、苦戦を強いられている。しかし0クラスではトップとの点差はわずかに2点。十分逆転可能な位置に着けている。

Day1 終了時成績(Pクラス)22点満点
①Saxtorph(デンマーク) 22点 22.5秒
18木島 18点 37秒 41森 11点 93秒

Day1 終了時成績(0クラス)22点満点
①Libor Forst (チェコ) 22点 27秒
①Stig Gerdtman(スウェーデン) 22点 27秒
13鈴木 21点 29秒 24木村 20点 41秒
30田中 20点 76秒

モデル2

スキーのバイアスロン練習場のようところが会場。伝統的なノルウェー地形とのことだったが、なるほど地図を見ると確かにコンターの曲がり具合が日本でよく見る0-Mapとは違っている感じがする。かくかくと曲がっている印象を受ける。しかしだからと言って、地図と現地の対応が難しいというわけでもない。十分対応可能だ。



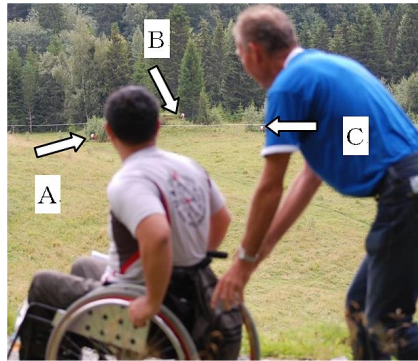
真剣な表情で確認中(鈴木選手)



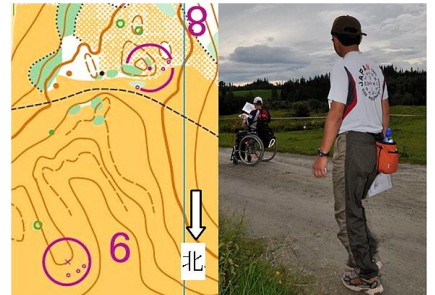
地図と現地を対応中(森選手)

Day2

スキー場周辺の山林がDay2の舞台。Day1同様、プレスタート後に同じフラッグ群を使用したTCが2問、その先に20コントロールのコースが待ち構えている。この日のコースは距離も長いし、時間も長い。3時間近くの間、集中力を持続させて戦う必要があった。周辺特徴物との位置・高さ関係の把握、遠方特徴物の把握、特徴物間の距離の把握など、コントロールの課題も多岐に渡っていた。



⑧付近、遠方特徴物(木島選手)
実は木島選手の顔の両側とエスコートの左袖の脇に小さくフラッグが写っているのだが、遠方で小さすぎて写真では良くわからない。



(田中選手↑)



(↑木村選手)(奥の車椅子は木島選手)
写真は⑨を北西から南東方向(沢線方向)に見ているところ。
小さすぎて良くわからないが、矢印の延長上(植え込みのようなライン沿い)にフラッグが3個付いている。
沢線と垂直な方向から見ると、フラッグと独立樹との距離感がつかみやすい。

さて、Day2の結果、残念ながら日本選手の巻き返しはならなかった。

今年の世界選手権はスウェーデンの圧勝であった。次回2011年はフランスでの戦いが待っている。

Pクラス2日間総合 43人 44点満点
①Ola Jansson(スウェーデン) 43点 67秒
②Wahlgren(スウェーデン) 41点 33.5秒
③Søren Saxtorph(デンマーク) 41点 51秒
30 木島英登 31点 118秒
43 森 長三 19点 194.5秒

0クラス2日間総合 52人 44点満点
①Stig Gerdtman(スウェーデン) 44点 76秒
②Kontkanen(フィンランド) 43点 68.5秒
③Ivo Tisljar(フィンランド) 43点 113.5秒
17 鈴木規弘 39点 123.5秒
34 木村治雄 36点 142秒
35 田中 徹 36点 162秒

チームコンペティション 14カ国 88点満点
(各国P/O両クラス上位各2名の合計)
(Day2のみの成績により争う)

①スウェーデン 84点 114秒
②フィンランド 81点 258.5秒
③クロアチア 76点 185.5秒
14 日本 55点 363秒

(田代雅之)